

# 大ダイ狙いに最適なタックル

## バイパースティック2551

●オールソリッドワンピース設計が粘りと強度を生み出し、コマセワークから誘い、大ダイの引きもなんなくかわす。総糸巻き仕上げ、スリムな本体は反発力を抑えてしなやかさも向上し、食い込みを促し、跳ねをも減らす。高級感あふれるゴールドガイドと美しいラッピングは持つ者を満足させる仕上がりだ。他に全長2.35mの2351も用意。発売中。

アイテム	全長(m)	継数(本)	仕舞(cm)	自重(g)	先径/元径(mm)	オモリ負荷(号)	適合クランプサイズ	カーボン有率(%)	メーカー希望本体価格(円)
2551	2.55	1	217	320	1.4/17.9	60~100	M	93	102,000

## リーディングMG64M-235

●新バランス理論採用、ゲームロッドの領域を拡大するモデルとして誕生したのがMG(マルチゲーム)シリーズ。今回福田さんが使用したのはコマセダイにも向く64Mモデル。コマセが振りやすいだけでなく、大ダイが掛かっても魚に主導権を与えないファイトが可能。手にフィットするゼロシートも斬新だ。全13モデル。発売中。

アイテム	全長(m)	継数(本)	仕舞(cm)	自重(g)	先径/元径(mm)	オモリ負荷(号)	適合クランプサイズ	適合ハリス(号)	カーボン有率(%)	メーカー希望本体価格(円)
64 M-235	2.35	2	122	118	1.6/9.7	30-100	SSS	~8	82	42,000

## シーボーグG300J

●シーボーグ300Jをベースに、さらなる高耐久を実現したのがこのリール。追加されたデブスアラーム、電子ドラッグサウンドはまさにコマセダイ向き。自重575gは手持ちでも快適で感度もアップ。他に左巻き300JLも用意。発売中。

●ギア比6.0、自重575g、最大ドラッグ力16kg、糸巻き量PE3号400m、4号300m、メーカー希望本体価格114,000円

▲ジョグパワーレバーは瞬時に巻き上げ調整が行える

## NEW タフトランクGU4300

●堅牢、頑丈でダイワ史上、最もタフなクーラーが新登場。サイドハンドル&キャスター付きで持ち運びも楽らく。容量43L、他にS4300も用意



▲2リットルのペットボトルも収納可能な背高仕様

### 動画連動!



★当日の動画はダイワ「船最前線」よりご覧いただけます。



▲福田さん会心の船中1枚目  
▼田淵さんは2キロ級をそろえた



▲ハリスは信頼のDフロン船ハリス



LEADING MG 64M235

SEABORG G300JL

★「操作性がいいのでコマワークもしやすいし、魚に主導権を与えないヤリトリが可能です」と福田さん

## コマセマダイ乗っ込み好期 最強タックルで大型に挑む

▶シーボーグG300Jはコマセダイに最適な機能が満載



▲落とし込みの誘いが有効だった



VIPER STICK 2551 + SEABORG G300J

★「きれいな曲がりですよ。しなやかでも底力があるので大ダイでも安心してヤリトリができます」と田淵さん

## 田淵雅生 福田豊起 満を持しての大ダイ攻略



★大ダイには出会えなかったものの、仲よく中ダイをゲット

THE FRONT OF OFF SHORE FISHING vol.84

# マダイ最前線

◀晴天ナギの釣り日和だったが、潮の流れが速かった at 南房西川名港出船 →

●東京湾口周辺の乗っ込み期のコマセダイはそろそろ終盤となるが、南房洲ノ崎～布良沖にかけてはこれから本格的シーズン、加えて大ダイメインとなるのが特徴だ。今回は田淵雅生と福田豊起の名手2人が、南房西川名から大ダイに挑んだ模様をお届けする。

「南房のコマセダイといえば狙いは大ダイです。できれば4キロ以上がほしいところですよ」と、すでに三浦半島剣崎沖でめざましい結果を出している田淵さん。一方の南房をホームグラウンドとする福田さんは、シーズンの幕開けを狙っての釣行。2人も満を持して今期初の南房出船であった。

5月下旬、乗船したのは大ダイ狙いで定評のある南房西川名港の竜一丸。5時半に出船し、航程10分ほどの洲ノ崎沖、水深70メートル前後からスタートとなる。

田淵さんが使用する竿はソリッドパワーシステム設計による大ダイを視野に入れた「マッドバイパー2251」、福田さんはゲームロッドでありながらしなやかな操作性が特徴の「リーディングMG」64M235を使用。2人もリールは「シーボーグG300J」、仕掛けはハリス4〜7号のテーパーライン12メートル、ハリスは9〜10号である。

船長の指示ダナは海面から57メートル。晴天ナギの釣り日和だが、潮の流れが速いよう、タナ取りが難しそう。しばらくして乗船者が大型らしき魚を掛けたものの、ハリス切れでバラシ。そんな大ダイの気配が漂ってきたころ、手持ちで釣る福田

さんがアタリをとらえた。心地よくリーディングを曲げる福田さんだったが、「うーん、サイズが……」と言いながら取り込んだのは、当地では小型の部類といえる1キロ級だった。

それでも船中初のマダイが上がったことで、乗船者一同「時合」を感じたに違いない。続いてアタリをとらえたのは田淵さん。軽く合わせを入れてヤリトリに入るとハイパースティックはしなやかに曲がり込む。

「そここの型ですよ」と余裕の巻き上げて、後検査23キロのマダイを取り込んだ。でも、狙

いは大ダイ、型を見たとはいえない2人も満足はしていない。こまめな入れ替え、落とし込みなどの誘いを繰り返し、なんとか大ダイへのアプローチを試みる。

以後はサバに邪魔されたりするなかで、散発的にアタリは訪れるものの、アタっても1〜1.5キロ級が多かった。ただ、船中で何度かハリスを切られるバラシも見られたので、改めてタックル&仕掛けの重要性を感じられた。

11時過ぎに納竿。田淵さんは2.3キロを2枚、福田さんは1.5キロを3枚。ここ数日は今一つの釣果に終わったものの、

「間違いないですよ、大ダイ」と口をそろえる。数かずの経験を積む2人の言葉だけに間違いないだろう。

「いつもの年よりだいぶ遅れているので、これから大ダイのチャンスです」と船長の言葉を聞き、再戦を期す2人だった。